



イリ・ブベニチェク (右)、オットー・ブベニチェク (左) と出演ダンサーたち © Martin Grega

SPECIAL INTERVIEW

JIŘÍ BUBENÍČEK

イリ・ブベニチェク

心の襞を描きつくす新作をお見せします!

新進気鋭のコリオグラファーとして、積極的な活動を開始したイリ・ブベニチェク。1月に日本で行われる公演を前に、自身の創作について語ってくれた。

て、ぼくはある人から二冊の本を贈られました。レオナルド・ダ・ヴィンチの画集です。何気なくページをめくっていたら、ある女性像に目が留まった。驚いたことに、ぼくはその絵のなかに祖母を感じたんです。そして、ダ・ヴィンチの絵の雰囲気や舞台に生み出したと思った。こうして『レ・スフレ・ドウ・レスプリ』は生まれました。『カノン』はこのバレエの最後のパートです。天国で三人の天使が舞っている。祖母の魂もそこにいます。でも、これはあくまでぼくの個人的なイメージ。観客のみなさんには感じるままに、それぞれの物語を作り上げてほしいと思っています。

——『辿り着かない場所』についても教えてください。

ブベニチェク 二〇〇五年にハンブルク・バレエに振付けた作品です。芸術監督ジョン・ノイマイヤーがぼくに素晴らしい機会を与えてくれたのです。音楽は双子の弟オットーが作曲してくれました。『辿り着かない場所』は、ぼくの自信作。もともとぼくらしい作品です。男と女、男と男、二人の人間に生じるさまざまな心の襞を描き出そうとしています。プラトンの『饗宴』の二節、愛につい

て、愛の起源について語られた二節からイメージを膨らませました。

——ブベニチェクさんの振付はつねにそうした人間同士のつながりがテーマになっていますね。

ブベニチェク ええ。ダンスは人間のエモーションを生み出すものだとぼくは信じています。実際のところ、ぼくはダンサーとしても、物語性のない振付には退屈を感じてしまいます。(笑) これはノイマイヤーの影響かもしれない。ステップ以上にエモーションや物語が重要なのだと彼は教えてくれました。ぼくにとつてステップを生み出すとは、エモーションを生み出すことと同じなんです。

——これからの活躍を楽しみにしています。

ブベニチェク 二月に行われるパリ・オペラ座バレエの『椿姫』にゲスト出演することが決まりました。オーレリ・デュボンを相手にアルマンを踊ります。だから、日本での舞台を終えたら、パリに向かわないといけない。いくつかのバレエ団からも振付のオファーをいただいています。ぼくの夢はいつの日かオットーとともに自分のカンパニーを作ること。一月の日本公演はその夢のための第一歩だと思っています。

新進気鋭のコリオグラファーとして、大きな注目を浴びているイリ・ブベニチェク。〇八年夏『エトワール・ガラ』で披露された『カノン』や『思いがけない結末』は、マチュー・ガニオらの好演も相まって、日本の観客に清新な印象を残した。バレエのテクニックをベースに置きながら新たな表現領域を切り開こうとする彼の振付には、いま熱い視線が注がれている。そのブベニチェクが、〇九年一月、『ブベニチェクとドレステン国立歌劇場バレエの俊英たち』と題した公演を彩の国さいたま芸術劇場で行う。

——一月の公演では、ブベニチェクさんの『ル・スフレ・ドウ・レスプリ

——魂のため息、『辿り着かない場所』、そしてフォーサイスの『ステック・プテクト』が上演されます。『エトワール・ガラ』で、ガニオ、リアブコとともに踊った『カノン』がとても印象的でしたが、『カノン』は『ル・スフレ・ドウ・レスプリ』の二部なのだそうですね。

ブベニチェク その通りです。『ル・スフレ・ドウ・レスプリ』は、〇七年、チューリッヒ・バレエに振付けた作品。亡くなった二人の祖母に捧げられています。ハンブルクでの舞台を控えているぼくは、相次いだ二人の突然の死をすぐには知らされなかった。だから、ぼくは二人にお別れを言うことができなかったのです。しばらくし

--	--	--	--

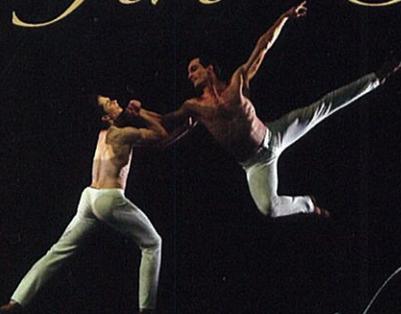
DANCE STAGE PREVIEW

10.01.23 ▶▶▶ 24 | Saitama Arts Theater Ballet



【ステップネクスト】ドレスデン国立歌劇場バレエ団 特別バージョン © Costin Radu

Jiri + Otto



ル・スフレ・ドゥ・レスプリー魂のため息 © Costin Radu

Bubenicek
Selected Dancers of
the Dresden Semper Oper Ballet

彩の国バレエ・ガラ

『ブベニチェクとドレスデン国立歌劇場
バレエ団の俊英たち』



辿り着かない場所 © J. Flugel

translate&text Sako Ueno



左より、イリ・ブベニチェク、オットー・ブベニチェク © Martin Grega

Jiri Bubenicek
イリ・ブベニチェク

ドレスデン国立歌劇場バレエ団 プリンシパル 振付家、ポーランド生まれ、チェコ国籍。ブラハ音楽院でバレエを学び、1992年ローザンヌ国際バレエコンクールでキャッシーアライズ賞を受賞。1993年ハンブルクバレエ団入団。1995年ソリスト、1997年プリンシパルに任命される。椿姫、冬の旅、ニンジスキーなどノイマイヤー作品での主立った役の他に、バラシム、マツエック、イリキリアン、ナチャドワートなどの作品を踊る。2002年には椿姫のアルマン役でブゾフ賞を受賞した。2006年にドレスデン国立歌劇場バレエ団にプリンシパルとして迎えられ、またフランスの振付家として、2009年5月にニューヨークシティバレエ団に Toccata、2007年、チューリッヒバレエ団に Le Souffle de l'Esprit、2005年、ハンブルクバレエ団に Unerreichbare Orte などを提供している。2002年にはヴァルナ国際バレエコンクールで Made in Earth の振付により2位、18回ハノーヴァー国際振付コンクールで、Prisoners of Feelings がオーディエンス賞を受賞している。舞台以外では、ドニーアフィヤー監督のドキュメンタリー映画「ワーキング・オブ・パラダイス」で踊り、ノイマイヤーのDVDでは「幻想-白鳥の湖」の白鳥に、ベニスに死すに出演した。また、2005年にはTV局ARTEにより双子の兄弟オットーとのドキュメンタリーフィルム Die Ballett-Zwillinge (The Ballet Twins) が製作された。バレエ団以外での活躍も多く、パリ、オペラ座バレエ団をはじめ、欧州の主要バレエ団に客演している。1999年のウィーン・ニューイヤーズコンサートを始め、世界各国でのゲスト出演も多いが、2009年5月には故郷、ブラハでブベニチェク兄弟プロデュース公演「ブベニチェク&ブレンス」を行い、会場のブラハ国立劇場で2日間渡ってスタンディングオベーションを浴びるなど大好評を博した。日本には「世界バレエフェスティバル」(2000年)、「エトワール・ガラ」(2005、08年)、自身のグループ公演(2005、06年)等で来日している。

STAGE INFORMATION

彩の国バレエ・ガラ「ブベニチェクとドレスデン国立歌劇場バレエ団の俊英たち」

[日時] 2010年1月23日(土)・24日(日) 開演15:00

[会場] 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

[料金] 一般 S席 ¥8,000 A席 ¥6,000 学生 A席 ¥3,500

[出演]

ドレスデン国立歌劇場バレエ団

プリンシパル: イリ・ブベニチェク、キイ・アルバイ

ファースト・ソリスト: エレナ・ヴォストロトフィナ、カテリーナ・マルコフスカヤ

セカンド・ソリスト: スヴェトラナ・ギレヴァ、オレク・クリムク、ヨン・ヴァイエホ

コリフェ: 浅見結子、ドゥオシー・ジュウ、イシュトヴァン・シモン、クラウディオ・カンジアロッシ

コール・ド・バレエ: ラケル・マルティネス

ハンブルク・バレエ団

プリンシパル: オットー・ブベニチェク 他

[お問合わせ] 彩の国さいたま芸術劇場 [TEL] 0570-064-939 (10:00-19:00)

今回のバレエ・ガラの演目は、イリが振付けた2作品と、ウイリアム・フォーサイスの「ステップ・テキスト」で構成。

「まず、振付家としての私を見てもらいたいと考えて、小品集ではなく、ある程度の規模の作品を上演することにしました。」

「ステップ・テキスト」は、バレエ団の名刺代わりに選んだもの。芸術監督アーロン・S・ワトキンは、フォーサイスが芸術監督をしていたフランクフルト・バレエの元団員。そんなわけで、ドレスデンのレパートリーには、フォーサイス作品が豊富にあるんですよ。

今回の演目の1つ、05年にハンブルク・バレエのために振付けた「辿り着かない場所」は、ギリシアの哲学者プラトン(紀元前427〜347)の思想に触発された

作品だという。

「私の創作の出発点は、ケース・バイ・ケースです。音楽や文学作品にインスパイアされることがあれば、初めて関わるバレエ団のダンサーを自分の目で見て、創作の端緒をつかんだこともありました。この作品では、愛について書かれた文章の一節から出発し、人と人がどのように恋に落ち、どのように触れ合うのか、そのプロセスを探りました。なぜ誤解が生じるのか、なぜ争ってしまうのか、という問いも、作品の根底に流れています。」

オットーが音楽を、エルザ・ヴァアネルが衣装を手がけた。

「自分一人で創作するのではなく、様々なアーティストとタッグを組んで話し合いを重ね、アイデアを進展させていくのが、私にとって

理想の創作プロセスです。」

ハンブルクでの創作時には、ジョン・ノイマイヤーが芸術監督として、リハ・サルに立ち会うこともあった。現代バレエ界を代表する巨匠が目を光らせていると思うと、緊張感がいちだんと増したのではないだろうか。

「ノイマイヤーは、とても協力的でした。おかげで、思い通りに作品を作ることができました。リハ・サルの時間を十分に確保してくれ、大勢のダンサーを使わせてくれました。こうすべきだ、というような口出しは一切ないで。でも、たとえば私が照明プランを練っている時に彼の意見をきくと、気軽に相談にのってくれました。もちろん緊張感もあつたけれど、彼の考えを知りたい気持ちのほうが強かった。どうやら

気に入ってもらえたようで、ほんとうに嬉しかったですね。」

日本公演で「辿り着かない場所」を踊るのは、ブベニチェク兄弟とドレスデン国立歌劇場バレエ団の10数人の俊英達。同団はもともドイツの主要バレエ団の一つと目されていたが、06年にワトキンが芸術監督に就任したのを機にレパートリーを現代作品にシフトし、ヨーロッパのバレエシーンでの存在感を増しているという。今回、09/10年シーズンの真っ最中にもかかわらず、同団の4分の1に相当する10数人が来日予定。同バレエ団の、実質的な日本デビューとなる。

「バレエ団としてはまだ来日したことはありませんが、世界各地の才能豊かなダンサーを擁した、高水準のバレエ団だと思います。

特に若手ダンサー達のどん欲さは、凄いですよ。何でも踊りたい、経験したい、と虎視眈眈としています。芸術監督のワトキンは今回の公演を、バレエ団を日本に紹介するまたとない機会だと受け止め、私達の「日本出張」を快諾。メンバーには、ベストの人材を選んだつもりです。私の作品と相性が良いだけでなく、カリスマ性を持ったダンサー達です。来日を楽しみにしています。」



アンドロペテ (クロード・ベルマシオン振付) © Thomas Kirchgraber



イリのフォーサイズとのリハーサル風景



来日する予定のドレスデン・バレエ団のダンサー達 © Martin Grega

2010年1月、彩の国さいたま芸術劇場に、伝説的な双子ダンサーがお目見えする。若手ダンサーの登竜門、ローザンヌ国際バレエコンクールに相次いで出場して強烈な印象を残し、付属バレエ学校を経てハンブルク・バレエ団に入団した、イリ&オットー・フベニチエクである。同団の芸術監督ジョン・ノイマイヤー作品に必要不可欠な存在として頭角を現したが、現在、イリはドレスデン国立歌劇場バレエ団でプリンシパル・ダンサーとして踊るかたわら、新進振付家として活動中だ。

「18歳の時にハンブルク・バレエ団に入団し、ジョン・ノイマイヤーという天才の下で充実したキャリアを歩む事ができました。13年間在籍したバレエ団を離れ、ドレスデン・バレエ団に移籍したのは、ダンサーのキャリアを終える前に、ハンブルクとはまた違ったレパートリーに挑戦し、違った人々と仕事をする機会を持ちたかったから。振付に割く時間を増やし、他のバレエ団におもむいて作品を作ることも念頭に置いていました。将来、自分のカンパニーを持つことを視野にいれて、新たな場で新たな経験を積む決心をしたわけです」

もちろん、ノイマイヤーの許で過ごした13年間は、何物にもかえがたい貴重は日々だった、とイリは振り返る。

「ジョン・ノイマイヤーから、ほんとうに多くを学びました。彼は、私という存在の一部になっている、と言いたいくらいです。テクニクや演技といった踊りに直結した事柄だけでなく、ダンサー、アーティストとしての心構えをも教わりました。振付家として歩み始めた私の可能性を認め、振付を続けるべきだと背中を押ししてくれた。感謝しています」

ドレスデン・バレエ団に入団して4シーズン目を迎えたイリは、自身のプロデュース公演で作品を上演する他、古巣のハンブルク・バレエ団をはじめ、チューリヒ・バレエ団、ニューヨーク・シティ・バレエにも作品を提供してきた。

「ドレスデンではさまざまな作品を踊っています。いまは、『白鳥の湖』の王子役のリハーサル中。同時に振付のプロジェクトも進行しているから、振付家とダンサーの活動を両立させるのは、簡単ではありません。実際、プライベートよりも、仕事を優先せざるを得ない。でも、このヘースが永遠に続くのではない、いまが頑張りがきだと自分に言い聞かせて、毎日24時間、働き抜いていますよ」

（笑）

ダンサーとして種々の振付家の創作に関わることは、必要不可欠な勉強の場。稽古場の外でもアンテナを張り巡らせ、あらゆる体験から貪欲に吸収する姿勢を貫いている。

「他の振付家と仕事をしている時は、何はさておき、1人のダンサーとして最善を尽くします。同時に、その振付家がどう創作する



ドレスデン国立歌劇場 © Matthias Creutziger

のか、他の人達とどう接するのか、どのように照明を使うのか、つばさに観察しますよ。美術館に足を運び、現代アートやインスタレーション、建築から刺激を受けるのも大切ですね。目を見開き、何かを吸収し続けたい。いつかきつと、自分の創作に役立つだろうと信じています」

イリ作品ではしばしば音楽を担当するオットー・フベニチエクとは一卵性の双生児。単に外観が似ているだけでなく、研ぎすまされたテクニクと、男性的な存在感を併せ持った、いすれ劣らぬ逸材だ。

「ハンブルクでは、よく一緒に舞台上立ちました。私達の外見は瓜二つですから、観客の皆さんには楽しんでもらえたのだらうと思います。でも私達自身は、お互いを双子だと受け止めたことはないんですよ。あくまでも兄弟の感覚。現在は、選曲の相談をしたり、新作を作曲してもらったりする、創作の重要なパートナーです」

Dance

Bubeníček and the Dresden Ballet Tremendous Skill and Intellectual Creativity

The mention of Dresden, in the former East Germany, is unlikely to evoke associations with ballet in most people's minds. The Dresden SemperOper Ballet (Dresden State Opera Ballet) has, however, made great strides since the 1990s by inviting influential figures of great individuality to serve as its artistic director. Its superb performances at the Saitama Arts Theater enabled me to gain a truly direct appreciation of the high level of both the creativity of the group and the abilities of the individual dancers.

Two of the three programs were being staged for the first time in Japan, both choreographed by Jiří Bubeníček, a principal dancer of the company blessed with rich powers of expression.

"Unerreichbare Orte" is a piece imbued with profound subtlety, its music composed by Jiří's twin brother Otto (of the Hamburg Ballet). The opening scene is starkly powerful, depicting couples entwined, their bodies swathed in huge skirt-like cloths in a manner suggestive of diverse aspects of love. That is followed by three pas de deux confined to the front part of the stage, the scene then transitioning into a full-stage ensemble before revisiting the opening scene. The entire performance bursts with variety, and tension is maintained unallayed throughout. The choreographer is outstanding not only in his sense of how to bring out the full physical expressiveness of the dancers' bodies, but also in his ability to structure the dance intellectually to envelop the entire area of the stage.

The second piece being premiered in Japan, "Le Souffle de l'Esprit," pays homage to deceased grandmothers. It boldly takes up elements – such as Pachelbel's Canon and a da Vinci painting – whose fame and familiarity give them strong power to infuse the ambience of the performance, and that popularity is then sublimated into an almost religious value imbued with simple clarity.

Two other dancers who impressed me particularly for their conspicuous technique and delicate musical expression were Elena Vostrotina, who danced in all three works, including "Steptext" (choreographed by William Forsythe), which formed the second part of the program performed between the two premiers, and Jón Vallejo, the central dancer accompanying the Bubeníček twins in the Canon scene.

January 24
(Yuki Nagano, Dance critic)

[Caption]

舞踊

若手振付家の今後に期待

ブベニチエクト ドレスデン国立歌劇場バレエ団の俊英たち

長年、ハンブルク・バレエ団の中心的なダンサーとして活躍してきたブベニチエク兄弟。弟のイリが所属するドレスデン国立歌劇場バレエ団を見た(1月23日、彩の国さいたま芸術劇場)。

振付家として頭角を現しつつあるイリによる2作品のうち、「迎り着かない場所」は40分を超える力作。冒頭、3組の男女が、それぞれ床に大きく延びた布に下半身を包まれて立つ。闇に浮かぶ美しいシルエツトが、これから展開する愛の姿容の始まりだ。

現代風の群舞や男同士デュオがあり、最後は4組の男女が愛、嫉妬、争いを思わせる表情を見せる。バレエの技法を軸に、オフバランスや体のひねり、日常の仕種まで取り入れた緻密な構成が光る。しかしイメージの深度というものが感じられない。「愛」という自明の物語に頼りすぎているからか。物語の不在に耐える身体性こそ、今の舞踊家に求められるのだが。

もう一つのイリ作品「ル・スフル・ドウ・レスプリ」魂のため息」は、亡くなった祖母にささげられた愛情あふれる作品。ダンサーたちの力量を生かした周到な振り付けはいいのだが、背後に投影される名画や聞きなれた名曲は、安易に哀悼や感傷につながるだけに、作品の個性をそいでしまう。

ウィリアム・フォーサイスの名作「ステップテキスト」は、このバレエ団のために再振り付けされた。まるでバレエから機能美だけをかすめとったかのような鋭角的な切れ味。初演時よりも肉体と野性味を息づかせてフォーサイスを蘇らせる。特にエレナ・ボストロティナが素晴らしい。

技術・表現力ともに際立つこのバレエ団とともに、現代バレエの数少ない若手振付家としてイリが歩む「これから」に期待したい。

(中央) 池上直哉氏撮影



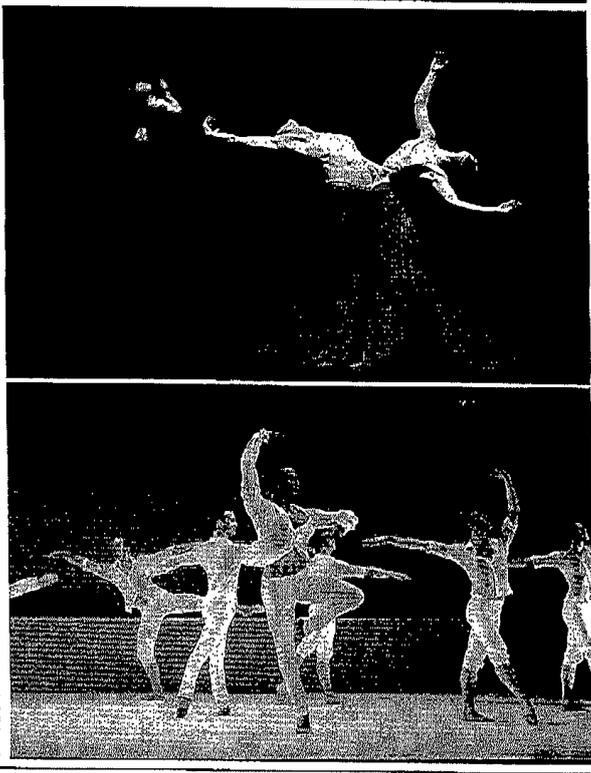
「ル・スフル・ドウ・レスプリ」を踊るイリ・ブベニチエク

(石井達朗・舞踊評論家)

音楽・舞踊会のプロダクション印刷は... 株式会社黒岩誠章堂 TEL 045(501)0384(521)2478

発行所 株式会社新舞台 東京品川区西五反田2-24-7 TEL 03-5496-2461 FAX 03-5496-2462

週刊 オン★ステージ 新聞 THE PERFORMING ARTS JOURNAL 2010年2月12日 第1825号 (週刊・毎週金曜日発行) 昭和46年6月3日第三種郵便物認可 定価150円(税)



ナイーブな感性で新たな地平切り開く ブベニチエクトドレスデン国立歌劇場バレエ団の俊英たち

ドレスデン国立歌劇場バレエ団の俊英たち。ブベニチエク兄弟の活躍は、現代舞踊界に大きな影響を与えている。彼らの作品は、伝統的なバレエの枠組みを打破し、新しい表現方法を追求している。特にイリ・ブベニチエクの作品は、その感性の豊かさと技術の高度さが際立っている。今回のドレスデン国立歌劇場バレエ団の来日公演は、その魅力を存分に発揮する貴重な機会である。

「迎り着かない場所」は、3組の男女が、それぞれ床に大きく延びた布に下半身を包まれて立つ。闇に浮かぶ美しいシルエツトが、これから展開する愛の姿容の始まりだ。現代風の群舞や男同士デュオがあり、最後は4組の男女が愛、嫉妬、争いを思わせる表情を見せる。バレエの技法を軸に、オフバランスや体のひねり、日常の仕種まで取り入れた緻密な構成が光る。しかしイメージの深度というものが感じられない。「愛」という自明の物語に頼りすぎているからか。物語の不在に耐える身体性こそ、今の舞踊家に求められるのだが。

もう一つのイリ作品「ル・スフル・ドウ・レスプリ」魂のため息」は、亡くなった祖母にささげられた愛情あふれる作品。ダンサーたちの力量を生かした周到な振り付けはいいのだが、背後に投影される名画や聞きなれた名曲は、安易に哀悼や感傷につながるだけに、作品の個性をそいでしまう。

ウィリアム・フォーサイスの名作「ステップテキスト」は、このバレエ団のために再振り付けされた。まるでバレエから機能美だけをかすめとったかのような鋭角的な切れ味。初演時よりも肉体と野性味を息づかせてフォーサイスを蘇らせる。特にエレナ・ボストロティナが素晴らしい。

技術・表現力ともに際立つこのバレエ団とともに、現代バレエの数少ない若手振付家としてイリが歩む「これから」に期待したい。

舞踊評論

池上直哉氏撮影

「ル・スフル・ドウ・レスプリ」を踊るイリ・ブベニチエク

(石井達朗・舞踊評論家)